

「シニア海外ボランティア」

森田 章一

MORITA Shoichi

プラスチック加工のスペシャリスト

高さ5メートルはある機械を巧みに操り、プラスチック原料からフィルムを作り出していく若者たち。コロンビア南西部、サンティアゴ・デ・カリの職業訓練校では実習が行われていた。指導に当たるのは、シニア海外ボランティアの森田章一さんだ。

大学卒業後、得意科目の化学で自動車開発に携わりたいと、自動車メーカーに就職した森田さん。約20年

JICA Volunteer Story

PROFILE

1951年愛知県出身。大学卒業後、日産自動車株式会社、富士ゼロックス株式会社に勤務。定年退職後、2012年9月からシニア海外ボランティア(プラスチック加工技術)としてコロンビアで活動中。

「技術者の技と心を磨いてほしい」

大学の学費が払えず、無償の職業訓練校で学ぶコロンビアの若者たち。彼らが就職に必要な知識と技術を身に付けられるよう、シニア海外ボランティアの森田章一さんは、プラスチックの加工技術を伝えている。



「状態をよく見て、慎重に操作してください」。チューブを伸ばす作業を指導する森田さん

にわたり、プラスチックやゴムの部品の開発を手掛け、電気機器メーカーに転職した後も付加価値の高い部品の開発に力を注いだ。海外での仕事も多く、ベルギーには3年半滞在。現地での業務を経て、もつとその土地に根差し、現地の人のためになる仕事がしたいと思うようになった。

そんな中、会社の元同僚から、定年退職後にシニア海外ボランティアに参加したという話を聞く。「自分の経験を生かして国際貢献できてやりがいがあった」。その言葉に心を突き動かされた森田さんは、インターネッ トで募集要項を見てみることに。いくつもの職種がある中、「プラスチック加工技術」に目が留まった。自分以外にこの職種の適任者はいないのではないかと。森田さんは心を決めた。

技術者の心構えを伝える

コロンビアには、政府が運営する職業訓練校が全国各地にある。高校卒業後、大学の学費が払えない若者たちのために、1、2年間、無償で教育を提供しているのだ。工業科、商業科、調理科、看護科など、卒業後の就職に直結するコースが用意され、約100万人が学んでいる。

森田さんが配属されたのは、樹脂加工や金属加工を学ぶサンティアゴ・デ・カリ市内の学校。担当は、フィルムやチューブの製造など、プラスチックの加工技術の指導だ。「学業不振や経済的理由で卒業できない生徒が約4割いると知り、全員が技術を身に付け、就職できるよう後押ししたいと思いました」。同僚のオマール・オサール先生と共に、約25人のクラスを4つ受け持つことになった。

何回か授業をこなすうちに、生徒たちの課題を見付



a.フィルムを作る際に必要な材料の重量を計算する方法を指導。しっかり理解できているか、常に生徒の顔を見回している
b.機械の上部でフィルムが作られ、巻き取られていく。生徒たちはフィルム幅が規定通りか巻尺で測定する
c.森田さんが活動する職業訓練校。バスの運賃を払えず歩いて通学する生徒もいる
d.コロンビアで障害者の自立を後押しする青年海外協力隊員の依頼を受け、森田さんは障害者が使いやすいスプーンを試作した

けた。問題の答えさえ分かればいい、という考え方が強かったのだ。なぜその答えになるのかというプロセスを重視しなければ、深く理解できず、応用もできない。

そこで、目を付けたのが実習の時間だ。「私がそうであつたように、実際に手を動かして、失敗し、悩み、解決策を導き出した経験は、必ず次につながります」と森田さん。座学に比べ、実習の時間が少なかつたため、オサール先生の賛同も得て、少しずつ増やしている。

その時間を使って、森田さんは日本の製造業の作業効率や安全性の高さを支える考え方である5S※も伝えている。ある日、プラスチックを加工する機械の使い方を学ぶ実習のこと、機械の周りがプラスチックのカスで汚れていたのに、一部の生徒がそのままにして帰ってしまった。翌日、森田さんは「後片付けをきちんとしないと、次に使う人が迷惑するでしょう。思わぬけがにもつながります」と一喝。生徒たちは神妙な面持ちで聞き入っていた。

「5Sの中の、しつけ」は、こういった実体験を通して伝えることが重要だ。技術だけでなく、技術者としての精神も身に付けてほしい。森田さんの根気強い指導に生徒たちの態度が少しずつ変わり、作業場を自分で整理整頓するようになった。

そんな森田さんには、オサール先生も熱い信頼を寄せる。「モリタさんは、プラスチック加工の最新の知識を豊富に持っています。生徒たちには、日本の熟練の技術者から最大限のことを学んで技術を磨いてほしい」と期待する。

「残りの活動期間、少しでも生徒の実技能力が向上するように指導したい」と森田さん。日本の技術者の熱い指導に、コロンビアの若者たちはきつと応えてくれるだろう。